

---

# 【びく東陰】さよならだけが【弐ノ幕IF】

久字

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【ぴく東陰】さよならだけが【弐ノ幕IF】

### 【Nコード】

N4427N

### 【作者名】

久字

### 【あらすじ】

ピクシブ交流企画・ぴく東陰の弐ノ幕イベントでのパレル作品。交流はなし・自キャラのみ。企画参加者でないと分からない流れです。自キャラはこちら [http://www.pixiv.net/member/illustration.php?mode=medium&amp;illustration\\_id=10641012](http://www.pixiv.net/member/illustration.php?mode=medium&amp;illustration_id=10641012) 弐ノ幕のイラストです。

**（前書き）**

ピクシブ交流企画・ぴく東陰の弐ノ幕イベント、  
パラレル小説。  
とても身内向けです、すみません。

鈴ヶ森刑場跡地にて。

この盃を受けてくれ  
どうぞなみなみつがしておくれ  
花に嵐のたとえもあるさ

鬱蒼とした草木に囲まれた鳥居の下で、暗い穴はうごめき、ざわめく妖たちはその穴に引きずり込まれつつある男を狙っていた。その男はもはや腰から上が地上にあるだけで、死んでいるかのように思えるほど、静かな息を細く紡ぐのみ。穴に抗う右腕には力が入っているのが見て取れるが、その指先はゆるやかに白くなっていく。

地面暗い穴に全て喰われてはなるものかと、逸る一匹の妖が駆け出し、男を頭から喰らおうと大きく口を開いた。

しかしその口に入ったのは男の頭ではなく、亡者の腕にからめとられてはいるが、なんとか自由に動く左腕で投げ込まれた無数の針状の元コインだった。

「まだ、生きていたので食べられるのは、ご免ですねぇ……」

細いがはつきりとした声で男は一人ごちる。

まだなんとか回る頭は、ゆっくりと引きずりこむその穴から逃げ出す方法を画策していた。しかしそれには二つの問題があった。

【一つはこの穴から出る方法】

男の下腹部は全て吞まれ、感覚もないが、死んでいない。

その現状からして【喰われて】いるわけではない、身体は恐らく穴の中に【存在】しているのだ。

力任せにでも抜け出せれば一番確実だが、男の計算では削れ行く体力のことも含め、十数分保つ程度だろうと答えが出ていた。

それならば、と男は考える。

土行のこの地に、相生である金行の力で攻撃してこの穴を消滅させる

失敗すればそれまで。

さらに悪いことが重なるならば、穴が消滅することで吞まれている下半身も消滅する可能性がある。

## 【二つめ それは後始末】

男は嫌に冷静に、【生】を取り逃がしてしまった場合のことまで考えていた。

一つめの問題で失敗してしまった場合

笑う口、涎を垂れ流す口、多くの妖のその口が、死んで残った自身の体を喰らうかもしれないというとても嫌な、しかし現実的な予測。

乱れる五行と蔓延る妖たち。百年以上続くこの妖との関係性を調べたならば、確実に妖も知恵をつけていることが見て取れていた。その知恵はどこから？ 経験則か？ 書物か？ 人とのやりとりか？ それとも、人を喰らうことか？

さらに言うならば男にとって、諜報員として、これまでの記録・記憶を漏らすのは絶対的タブーである。

自らのホームを護るためにも、妖に知恵を与えるなんてもつてのほか。

とすれば、もし男が死ぬのなら文字通り【跡形もなく】死ななければならぬのだ。

形や物を遺すことが出来ない死というものは、死ぬ側にとっては薄ら寂しいなあなどと男は思い、病院のベッドの上で他界した父親を羨ましく思った。死んだ人を羨むなどつまらないことなどないと男の母親が笑っているのを思い出して、少しだけ唇を噛んだ。

「みつともない姿を晒さずにすむってのはいいんですけどね……」

苦笑が漏れるが、それを見る人はいない。さらに暗くなる穴と空がじりじりと男を急かして、男はとうとうコインを一掴み、指から溢れるほどに掴んだ。そして滔々と言葉を連ねた。

「ポテチまだ買ってないし、戻ったら黒金の守をもらって大事に託っておきたいし、の前の天体観測での始末書とか、

あと資料室の整理忘れてるなあ。ああ、お弁当も頼んでおいたんだった。それから……」

つらつらと男の言葉は途切れない。

聴く者などいないその言葉を、掌のコインに落とすようにこぼす。男にとってその言葉は、もしかしてすぐに訪れるかもしれない死を拒む、愛しいホームへの言霊だ。

「願わくば、」

男は言葉を静かに締めた。

「この慟哭に、慰めを」

そうして緩やかに、強張った左手をゆるめ、暗い穴へとコインを落とした。穴に吸い込まれるように落ちるコインは、やがて反射する為の光さえも届かず黒く鈍くその色を変えていく。その深い深い場所で、コインは嫌な音と共に弾けた。小さな粒から大きな破片までが、鋭い切っ先を持って、穴の中をガリ、と引っかき、ズブリ、と突き刺したのだ

穴は、穴いっぱい反響するかのような音にならない響きをあげ、

うなり、ばちんとその口を閉ざした。

その瞬間、酷い声をあげたのは男の喉だった。

死の痛みというものを予想することは難しく、たとえ予想していたとしても、実際に痛みに出遭ってしまえば、そんな予想は遙か遠い昔の痛みにしかならない。死の痛みを知るには、その痛みから逃げられぬ、最期の一時に出くわさなければならぬのだ。痛みとはそういうもので、死とは最期の痛みと出遭う舞台なのだ。

そして男はいま、その一時の中、血の匂いの舞台にいた。

綺麗に切断されてしまった胴体から止め処なく溢れる血に、周囲の妖精たちはざわめき猛る。そして我先にと飛び出すほどに大きく口を開け笑った。

その笑いを閉ざすほどに、男は絶叫を押し込み、吼えた。片目だけをぎらつかせ、妖をその場に留めるほどの殺気と痛みを空気に響かせて。

妖の脚が止まったことを微かに視界に映した男は、残っていたコイン全てを左手に掴むと、その掌の中でコインを溶かし、喉の奥へと押し込んだ。酷い金属匂は血の匂いと混じり、舌を麻痺させるような味に噎せ返ってはまたその匂いを酷くした。それでも全てを飲み込み、一滴たりとも戻さぬようにと男はもう支える必要のなくなった右手で口元を押さえた。転がる上半身は、制服を赤黒く、黒衣をさらに深く染め上げていく。そんなことに構う暇はなく、男は深く深く目を瞑り、深く深く念じていた。

早く、と、痛い、という願いと感情が緋い交ぜになり、死への恐怖というものはまだ降りかからないでいた。

恐怖が降りかかったのは、その痛みが鈍くなってしばらくしてからだった。

男が気付いてみれば切断部分の痛みがなくなり、血が流れ出ていく感覚もなくなったのだ。そっと目を開いて真っ先に見えたのが、口元を押さえていた手が強張り、指先から黒く変色していつているその光景だった。

【徴の付いたコインは、術者の意識がなくなると黒ずみ、術者が死ぬと屑となる】

【体内にコインを取り込み、鉄分や微弱な金属質と同化させ、身体そのものをコインと同質にする】

【この状態で死ぬことで】

「ああ……何も残りません、ね……」

霞み始める視界の中、黒くなった指先がパラパラと崩れていくのを見て、男はようやく安堵した。これで自分の仕事は終わるのだと。何も迷惑をかけず、情報を届けられない役立たずではあったけれども情報を漏らさず、誰に知られることもなく、妖に喰われることもなく消えてなくなるのだと。最初で最期の賭けとも言える方法だったが、なんとかうまくいったのだと。

口元に浮かんだ僅かな勝利を意味する笑みは、次の瞬間崩れ去り、左目からは涙が溢れ、眼帯がにわかに水分を含んで重さを増した。

男の中に浮かぶのは、泣く自分がみつともないと恥じる思い、それでも涙が止まらない理由　ホームの仲間たちへの何か言い表せない思い、そしてもう消えてなくなってしまうその恐怖だった。

少しずつ手の形は崩れていくが、思わず彼はその半端な形の黒い手を口元に当てた。

泣くな、と自分に命じながら、男は冷静さを取り戻すために鈍くなりつつある頭を動かした。こんなところで泣いて何になるのだと。怨みも怒りも哀しみも残してはいけない、そんなものを残して黄泉比良坂で死ねば怨霊になってもおかしくない、それこそみつともない

バサリと手首が落ち、地面に当たって砕け、風がそれをさらに細かく崩した。

そうして現れた男の口元は、黒く固まった笑みが浮かんでいた。



こうして仁伊かずさという名の男は、跡形もなく消えていったのだ。

最期の最期まで残ったのは、千切れた制服と黒衣、そして最後まで彼の右目を隠していた眼帯だけである。

さよならだけが人生だ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4427n/>

---

【ぴく東陰】さよならだけが【弐ノ幕IF】

2010年10月9日15時39分発行